

保育内容「健康」の授業実施前において 学生が抱く健康諸概念の特徴

馬場 訓子 ・ 津島 愛子 ・ 三村由香里

保育内容「健康」は、近年頻発する災害への対応や感染症拡大等に大きく関連する分野として、その在り方は改めて注目されており、その重要性を認識した保育者の育成については、養成段階から検討していく必要がある。本論では、保育者志望学生が、保育内容「健康」の授業実施前に抱く健康諸概念の特徴と課題を明らかにすることを試みた。具体的には、保育者養成校において、保育内容「健康」の授業前の健康概念を捉えるため、文章完成法（SCT）を用いて記述データを収集した。記述データには主にテキストマイニングを援用した量的分析、及び質的分析を行った。また、各学年の健康諸概念等の比較により、特徴を検討した。これらを踏まえ、授業実施に関する提案を述べた。

Keywords：保育内容「健康」、健康概念、保育者志望学生

I. 問題と目的

1. 保育における保育内容「健康」の重要性

『幼稚園教育要領』において、「ねらい」は、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものであり、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域（以下、引用はそのまま「領域」と記す。「領域」と「保育内容」は同意として扱う）ごとにねらいが明示されている。保育内容「健康」は、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」ことを目指し、「明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう」「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」の3つをねらいとし、それらのねらいを達成するために指導する事項として、10項目の内容が示されている（文部科学省、2017）。それらの内容は具体的に、遊びの中で体を動かすことから食に関すること、健康な生活リズムや基本的な生活習慣の習得、病気の予防や災害時等の安全に関すること等、多岐に渡る。これらの「ねらい」が達成されるよう、幼児期の特性を踏まえ、環

境を通して行う幼児教育の基本に則り、遊びを通しての指導を中心として総合的に指導がなされる。

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」（2016年12月21日）においては、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」の1つとして、「健康・安全・食に関する力」を挙げ、これらを教科等横断的な視点で育むことができるよう、教科等間相互の連携を図ることの重要性が明示された（文部科学省中央教育審議会、2016）。幼児教育においては、小学校教育との円滑な接続が求められる中、幼児期に培う資質・能力が基礎となって小学校教育以降にも生きることを強く意識した保育の展開が重要であると言える。

保育内容「健康」は、ここ数年において頻発する自然災害への懸念や新型コロナウイルス感染症の感染拡大等に大きく関連する分野として、5つの領域の中でもその在り方について期待が寄せられ、改めて注目されていると言えるだろう。健康教育、安全教育は、共に命に直結する内容として、より一層重要性が増し、園全体で取り組むべき課題として議論される機会も多くなったと考えられる。例えば、感

染対策として挙げられる「三密」を避ける工夫や取組により、感染リスクを軽減する配慮が各園でなされているが、保育現場が幼児期の発達特性によって生じる感染対策の難しさへの対応に苦慮しながらも、感染対策に関する指導や消毒等の衛生管理が繰り返されているのが現状である。また、安全教育においては、特に自然災害等への対応について、発生前に保育者だけでなく子ども自身に対しても危機感をどのように感じられるようにするのか、発生後には適切な行動や対応ができるか等が課題として挙げられ、実際の災害を想定した訓練が各園で行われている。

そのような知識や技術は、園内だけで実践できればよいことではなく、家庭生活においても必要である。これまで以上に、子ども自身が自らを守るための知識と行動を身に付けられるよう、命を守る保育を展開していくことが期待されている。自分の命は自分で守る意識と力を、子ども自身が幼少期から養うことが強く求められる時代になったと言えるだろう。それに伴い、子どもの命を守るという、社会からの要請に対応できる保育者の育成について、養成段階から検討していく必要がある。

2. 保育者養成における学生に見る「健康」の概念

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015年12月21日)において、今後の教員養成に関する具体的な方向性が示され(文部科学省中央教育審議会, 2015), その後、教員養成の新たな教育課程が実施されている。幼稚園教諭の養成においては、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が設けられ、「イ 領域に関する専門的事項」と「ロ 保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む)」の構成となる中で、5領域に関する専門知識を備えた専門性の育成を目指し、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の育成が目指されている(神長, 2017; 片山・伊藤・馬場, 2020)。

西山・岡村・中川・片山(2017)は、保育者養成校における保育内容「環境」の授業において、環境概念の獲得に関する学生の学びの成果と課題を明らかにした。具体的には、授業実施において、学生の環境概念の変容を捉えるため、文章完成法(Sentence Completion Test; 以下, SCT)を用いた記述データを収集し、テキストマイニングを援用した量的分析を行い、記述内容を質的に検討した。その結果、まず、KHCoder¹⁾を用いた量的な分析から、最終回授

業では、「発達」「必要」「大切」「構成」「促す」「育てる」等の語と共起関係が強く、初回授業とは明らかに異なる語が示された。保育者として子どもの発達に必要なもの、大切なものを考え、環境を構成し、保育者自身も子どもの発達を支える人的環境として積極的に関わっていかうとする姿勢が窺えた。また、生活の中に子どもが学びの要素を見出したり、興味を持つ事柄に出会ったりといった、子どもが主体となって環境に関わる姿への視点が出現していることも示された。次に、本格的な実習が未経験でありながら、学生なりに環境概念を獲得している様子を確認でき、最終回授業時に保育者効力感の高い学生は、確かな環境概念を獲得している傾向があった。一方で、方法としての環境に意識が強く、内容としての環境にあまり意識が向いていない傾向があった。また、「身近な環境」という視点が弱いという特徴が見られた。

この研究は、一授業者による実践によって、受講した学生の環境概念がどのように変容したかを検討したものであるが、最終回授業での結果が必ずしも、現職保育者に求められる環境概念とは一致しない。そこで、西山(2021)は、保育内容「環境」における、学生の環境概念の特徴を現職保育者との比較から捉えることを目指した。その結果、「環境に関わる保育者の役割の捉え」「環境の統制可能性の捉え」「環境の基本的な位置付け」において、保育者志望学生と現職保育者との間に相違が確認された。これらを意識した、授業改善のための具体的な方途を提案し、実践、評価することを次の課題としている。

本研究では、保育者志望学生の環境概念の変容を捉えた上述の研究内容を参考にし、学生の健康概念に関する特徴と課題及びそれを基にした授業展開について検討する。その際、各養成校によって5領域に関する科目の配置が異なる状況を踏まえ、学年ごとに考察を行う。具体的には、学年ごとの学生の健康諸概念を捉えるため、文章完成法(SCT)を用いた記述データを収集し、テキストマイニング(text mining)を用いた量的分析、及び質的分析を行う。また、保育内容「健康」の指導力の自己認知や、幼児の発達に及ぼす健康要因の占有に関する学生の意識等について、得点化による数量データを収集し、量的分析を加える。これらによって、各学年の学生が、どのような健康諸概念を持っているかについて明らかにすることを目指す。そして、その知見を踏まえて、各学年における、「健康」に関する授業の指導内容の提案を行うことを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象及び時期

調査対象は、保育者養成校であるA大学の学生71名（男性3名、女性68名；1年15名、2年26名、3年19名、4年11名；平均年齢19.42歳、標準偏差1.01）である。学生は全員、幼稚園教諭免許状の取得を目指している。欠損値等はなかったため、この全員を分析対象とした。調査時期は、2021年4月であった。保育内容「健康」に関わる授業科目「幼児の健康」は、3年生の第1学期から履修が始まる。したがって、4年生以外の学生は、この科目を履修前である。

2. 調査内容及び手続き

健康概念の特徴等を検討するために、質問票への回答を求めた。質問項目は以下の通りで、回答内容を後の考察に用いた²⁾。

健康概念の特徴を問う質問：SCTに準じたものを用いた。SCTは、曖昧かつ省略された未完成文章（刺激文）に対する自発的表現によって被検者の総合的な理解を図ろうとする心理検査であり、何を連想するかという点に無意識が関与する、投影法の1つとされる（小林, 1999；佐野・楨田, 1960）。無回答や乏しい記述を避け、全ての調査対象から一定の広範かつ厚みのある回答を得るため、この手法を援用した。具体的な質問には、①保育における健康とは__（保育特有の健康概念の獲得について広く引き出す質問）、②健康は幼児__（健康が果たす幼児への影響等を広く引き出す質問）、③保育内容「健康」では__（保育内容「健康」が目指すところの理解を問う質問）、④保育内容「健康」は幼児の発達__（保育内容「健康」と幼児の発達に関わる認識を引き出す質問）、⑤私は保育内容「健康」を指導__（保育内容「健康」をどのように指導するか等、考えや思いを引き出す質問）を設定した。

保育者効力感尺度：三木・桜井（1998）による10項目。回答は、違いを捉え易くするため、「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「全くそう思わない」の7段階評定（7～1点）で得点化している点は留意を要する。保育者効力感は、三木・桜井（1998）により、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことが出来るであろう保育的行為を取ることが出来る信念」と定義されている。効力感は、ある行動が自分にうまくできるかという予期の認知されたものであり（Bandura, 1977）、行動と直接的な関連があ

る。学生の保育実践への自信や見通しを確認する。

保育への興味・関心、保育職の理解、及び保育職へのコミットメント：各2項目、計6項目。具体的には、「保育という職業に関心がある」「保育という職業に興味がある」、「保育という職業をわたしは理解している」「よき保育者となるために何をすればいいか理解している」、及び「保育者としてやっていくために、いま自分で何かしている」「授業以外に、自分で保育に関する本や雑誌、番組をみる」とした。回答は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「全くあてはまらない」の7段階評定（7～1点）で得点化し、各2項目の合計点を分析に用いた。

さらに、「あなたが考える保育者になるために必要な力を100としたとき、今のあなたの力は？（現在の保育力量の自己認知）」「保育内容「健康」を指導していく上で必要な力を100としたとき、今のあなたの力は？（現在の領域「健康」指導力の自己認知）」「幼児の発達に関わる全要因を100としたとき、健康が要因として占める割合は？（幼児の発達に及ぼす健康要因の占有）」と問い、0～100点で得点化を求めた。この質問は、SCTの回答への影響を考慮し、最後に求めた。調査対象者には質問票の説明を行い、理解を確認後、参加の同意を得た。また回答は無記名とし、匿名性を守り、データの取り扱いに留意することを伝えた。フェイスシートとして「性別」「年齢」「実習状況」等の記入を求めた。

調査対象者にはデータは全て統計的に処理し、個人を特定することはないことを伝え、同意を得た上で調査を実施した。調査実施に関わる配慮等は日本発達心理学会（2000）の倫理基準に準じた。また、岡山大学大学院教育学研究科研究倫理委員会の審査を受け承認を得ている（課題番号1、2021年4月9日承認）。

III. 結果と考察

1. 諸変数の特徴

保育に関連する実習状況を確認したところ、1年生、2年生は実質的な実習となる保育所実習、幼稚園主実習等は全員経験していなかった。3年生の多くは、2年次末に保育所実習（10日間）を経験している。4年生は、これらに加え、児童福祉施設などでの施設実習（10日間）、2回目の保育所実習（10日間）、幼稚園実習（4週間）等を経験している。

まず、これらの学生の特徴を記述するため、いく

つかの変数から検討した。表1には、対象学生について、諸変数の平均値、標準偏差の結果を示した。1年生から4年生までにおいて平均値に差があるかどうか検討するため、独立変数を学年、従属変数を点数とする対応のない1要因分散分析を行った。「保育職への興味・関心」では、有意傾向が認められた($F(3,67)=2.55, p<.10$)。1年生で高いものの、2年生、3年生で低くなり、4年生で再び高くなる、U字傾向が見られたが、最大値の14点に近い天井を示しており、幼稚園教諭免許状の取得を目指す学生のため、興味・関心は高かったと判断できる。これらの結果は西山ら(2017)とも一致する。「保育職の理解」では、有意な主効果が認められた($F(3,67)=6.81, p<.001$)。Bonferroniの法による多重比較(以下、多重比較は全てBonferroniの法による)の結果、2年生の保育職の理解に比べ3年生、4年生が有意に高いことが示された。3年生と4年生との間を含め、他の全ての学年間に有意な差はなかった。1年間の学びを終えた2年生が最も低く、保育職への理解が不十分だと認識しており、その後の学びを経て3年生及び4年生では保育職の理解が進んでいると捉えている。「保育職へのコミットメント」では、有意な主効果が認められた($F(3,67)=2.80, p<.05$)。多重比較の結果、2年生の保育職へのコミットメントに比べ、4年生が有意に高いことが示された。他の学年間には全て有意な差はなかった。2年生が最も低く、その後、上昇がみられるところは、保育職の理

解と同様と言える。4年生では、保育職に向けて何らかの行動を起こし傾倒していると言える。

十分な信頼性・妥当性が確認されている三木・桜井(1998)の保育者効力感尺度を用い、1要因分散分析により検討した。結果は、有意ではなかった($F(3,67)=.84, n.s.$)。主に2年生を対象とした西山(2021)では、平均値44.38(標準偏差9.32)との数値が示されており、ほぼ同様の結果と言える。まだ本格的な実習経験がない学年と、経験を有する学年との違いも予想されたが、結果は、保育実践に関わる自信や見通しに学年差は見られなかった。

「現在の保育力量の自己認知」では、有意な主効果が認められた($F(3,67)=11.33, p<.001$)。多重比較の結果、1年生及び2年生の保育力量の自己認知に比べて、3年生及び4年生が有意に高いことが示された。3年生と4年生との間に有意な差はなかった。また、「現在の領域「健康」指導力の自己認知」では、有意な主効果が認められた($F(3,67)=10.01, p<.001$)。多重比較の結果、1年生に比べ、3年生及び4年生が有意に高く、2年生に比べ、4年生が有意に高かった。標準偏差は、他の学年に比べ、4年生の値が低くなっており、確かな自己認知の高まりを示していると言える。「幼児の発達に及ぼす健康要因の占有」では、学年毎の違いが予想されたが、有意ではなかった($F(3,67)=.74, n.s.$)。また、標準偏差が大きいことから、発達に及ぼす健康要因の捉え方にかなり幅があると考えられる。4年生では、幼児の発達に及

表1 各学年における諸変数の平均値、標準偏差及び分散分析の結果

	1年 n = 15	2年 26	3年 19	4年 11	F値
1. 保育職への興味・関心	13.73 (.59)	12.62 (1.68)	12.68 (1.67)	13.36 (.92)	2.55 †
2. 保育職の理解	8.60 (1.18)	7.89 (1.53)	9.47 (1.78)	10.09 (1.64)	6.81 ***
3. 保育職へのコミットメント	9.07 (1.87)	8.27 (2.26)	9.05 (2.61)	10.55 (1.51)	2.80 *
4. 保育者効力感尺度(三木・桜井)	42.13 (10.75)	38.73 (6.86)	39.68 (7.39)	37.55 (7.39)	.84 n.s.
5. 現在の保育力量の自己認知	28.07 (19.34)	28.85 (12.06)	42.21 (15.31)	55.27 (9.37)	11.33 ***
6. 現在の領域「健康」指導力の自己認知	18.73 (15.90)	27.88 (15.02)	36.21 (14.57)	47.55 (6.80)	10.01 ***
7. 幼児の発達に及ぼす健康要因の占有	54.00 (18.82)	47.54 (21.91)	56.84 (22.12)	51.27 (23.00)	.74 n.s.

() 内は標準偏差。

† $p < .10$ * $p < .05$ *** $p < .001$

ほす健康要因を大きく捉えている学生と、幼児の発達に及ぼす要因は他にもあり健康要因を小さく見積もっている学生がいると考えられる。

表1に示されたように、3年生の「現在の領域「健康」指導力の自己認知」は、2年生と違いがなく、1年生よりは有意に高かった。A大学では、この3年生から保育内容「健康」に関する授業を履修することとなる。すなわち、1年生と同じく、ここまで保育内容「健康」に関わる授業科目を受講していないにもかかわらず、自らの指導力の自己認知は、1年生のときに比べ高まっている。既述のように、3年生と4年生との間に差はないものの、4年生は2年生より、有意に高い。また、標準偏差は明らかに小さくなっており、学年進行に伴う指導力の自己認知の高まりは明らかである。養成の成果としては望ましい傾向が確認されたが、これまで行われてきた授業のどこに焦点を当て、強化すれば、より自信や見通しを高められるか検討する必要があるだろう。

表2には、諸変数間の相関係数（両側）を示した。右上部には1～3年生の結果が示されている。まず注目すべきは、「保育職の理解」といくつかの諸変数との相関が高く有意であった（保育職へのコミットメント.280, 保育者効力感.285, 現在の保育力量の自己認知.309 いずれも $p<.05$ ）。保育という職業を理解しており、よき保育者になるために何をすればよいか分かっていると答えた学生ほど、保育職へのコミットメントが高く、効力感を有していた。また、現在の自分の保育力量を高く捉えていた。次に、「現在の保育力量の自己認知」「現在の領域「健康」指導力の自己認知」及び「幼児の発達に及ぼす健康要因の占有」の3者間の相関が高いことが注目される。また、「現在の保育力量の自己認知」と保育者効力感の相関も有意であった。さらに、「保育職への

の興味・関心」と「保育職へのコミットメント」との相関が高く、就職活動までは、まだ期間がある3年生以下の学生であっても、保育職への興味・関心の高い学生は、すでに保育職へ向けた行動をしていることが窺える。

表2の左下部には、4年生の結果が示されている。1～3年生の結果に対して4年生では、有意な相関は殆ど見られない。人数が少ないことが一因と言えるが、「保育職の理解」と「幼児の発達に及ぼす健康要因の占有」が $r=-.716$ と、5%水準で有意であるのみであった。高い負の相関を示しており、保育職の理解が高いとする学生は、幼児の発達に及ぼす要因は他にもあり健康要因を小さく見積もっている。逆に、保育職の理解が低いとする学生は、幼児の発達に及ぼす健康要因を大きく捉えている。保育職の理解は、自己評価によるものであるが、4年生と他の学年との間に、明らかな傾向の違いが見られた点は特筆に値する。

学年毎に諸変数間の相関係数を検討したところ、1年生では、「現在の保育力量の自己認知」と「現在の領域「健康」指導力の自己認知」が $r=.898$ 、「現在の保育力量の自己認知」と「幼児の発達に及ぼす健康要因の占有」が $r=.833$ 、「現在の領域「健康」指導力の自己認知」と「幼児の発達に及ぼす健康要因の占有」が $r=.765$ と1%水準で有意であった。2年生では、「保育職への興味・関心」と「保育職へのコミットメント」が $r=.431$ と5%水準で有意であった。3年生では、「保育職への興味・関心」と「保育職へのコミットメント」が $r=.603$ 、「保育職の理解」と「保育者効力感」が $r=.554$ と5%水準で有意、「保育職へのコミットメント」と「幼児の発達に及ぼす健康要因の占有」が $r=.661$ 、「現在の保育力量の自己認知」と「現在の領域「健康」指導力の自己認知」

表2 諸変数間の相関係数

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.
1.保育職への興味・関心		.099	.487**	-.066	-.070	-.231	-.020
2.保育職の理解	.504		.280*	.285*	.309*	.246	.083
3.保育職へのコミットメント	.346	.423		.031	.126	.002	.135
4.保育者効力感尺度（三木・桜井）	.436	.416	.303		.291*	.220	.163
5.現在の保育力量の自己認知	-.093	-.516	-.380	.227		.807**	.431**
6.現在の領域「健康」指導力の自己認知	.522	.210	.222	.266	.292		.326*
7.幼児の発達に及ぼす健康要因の占有	-.024	-.716*	-.256	-.484	.274	.188	

右上部は1～3年生 $n=60$, 左下部は4年生 $n=11$ 。

* $p<.05$ ** $p<.01$

が $r=.767$ と1%水準で有意であった。これらは、1～3年生全体における相関とほぼ同じ傾向と言える。

2. KHCoderによる健康諸概念の量的検討

保育内容「健康」に関わる、学生の健康諸概念の特徴について全体的な傾向等を検討するため、全記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder (Ver.3. beta.01) による分析を試みた。KHCoderは、ChaSen³⁾ (松本, 2000) による形態素解析を行った上で、抽出された語の詳細な計量的分析を行う。取り出した語の統計分析、コーディング結果の統計分析、元のテキストを確認するための検索や閲覧等の機能を持ち、柔軟な分析の環境を提供する (樋口, 2012)。質的なテキストデータを数値データと同じように扱うことから、膨大なテキストデータに潜む情報を要約し理解するには非常に有用である。

まず、学生が記述した全文 (刺激文は除く) をChaSenにより分かち書きし、15,166語を抽出した。抽出語の種類は1,137語であった。その中から5,911語を分析に用いた。分析に用いた品詞は、KHCoderの品詞体系に従った。また、一部の語を分けず、強制抽出の処理を行った (例えば「保護者」「保育者」「基本的生活習慣」等)。「思う」等の一般的な文末表現の語は分析から除外した。表3には、頻出語上位60語とその出現回数を示した。

次に、学生による記述の全体的傾向を把握するため「共起ネットワーク」の検討を行った。共起ネットワークとは、「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだもの」である (樋口, 2013)。図1には、群 (1年生から4年生) を見出しとして含めた共起ネットワークを示した

(表示語数61語 (入力語数91語), 表示共起関係90 (入力共起関係330), Jaccard係数 .20以上)。共起ネットワークでは、布置された位置よりも、線で結ばれているかどうかにより意味があり、線が太いほど共起の関係は強い。また出現数の多い語ほど大きな円で示されていることから、作成した共起ネットワーク図では、より視覚的に頻出語を捉えることができ、学年毎の頻出語の関連も一目で理解することができる。表4には、学年毎の特徴語とJaccardの類似性測度も示した。

図1では、各学年に共通する語が中央付近に布置され、その周りに学年間で共通する語、さらにその周辺部に学年毎の特徴語が示されている。また共通する語から結ばれた線の太さは、語によって異なる。1年生では、「理解」「成長」「状態」「知る」「知識」等の語との共起関係が強い。また、独自の語として「自身」「知る」「知識」「大人」等が示された。このように、子どもの健康の重要性を意識し、よく知りたいという意識が示されている。動詞に注目すると「学ぶ」「知る」等と共起関係が見られ、これから学び、理解をしていこうとする私について記述されている傾向が窺える。2年生では、「生活」「生活習慣」「成長」「状態」「幼児」「保育者」「自分」等の語との共起関係が強い。また、独自の語として「指導」「生活習慣」「保育」「運動」等が示された。1年生と共通する語も多い一方で、2年生独自の語や3年生と共通する語も多く見られる。「生活習慣」「運動」等、1年生と比べ具体的な語が挙がっているとともに、「発達」「保育内容」「指導」等、保育者としての視点に加わっている。3年生では、「育てる」「安全」「身体」「心」「体」等の語との共起関係が強い。また、独自の語として「楽しい」「安心」「行う」「育てる」「環境」「精神」等が見られる。健康の捉え方に拡が

表3 健康諸概念に関わる頻出語上位60語

抽出後	出現回数	抽出後	出現回数	抽出後	出現回数	抽出後	出現回数
健康	350	成長	46	運動	25	促す	18
幼児	175	身につける	44	活動	25	遊び	18
子ども	159	指導	43	動かす	24	守る	17
保育者	96	保育	42	力	24	保つ	17
大切	86	学ぶ	38	健やか	23	意識	16
必要	80	環境	37	様々	21	保護者	16
発達	66	保育内容	34	援助	20	安定	15
心	65	精神	33	過ごす	20	育てる	15
重要	64	安全	29	内容	20	影響	15
身体	64	知識	29	必要不可欠	20	自ら	15
生活	64	理解	29	元気	19	安心	14
体	57	楽しい	28	行う	19	十分	14
自分	52	関わる	28	習慣	19	睡眠	14
心身	47	自身	28	食事	19	満たす	14
状態	46	生活習慣	26	大人	19	遊ぶ	14

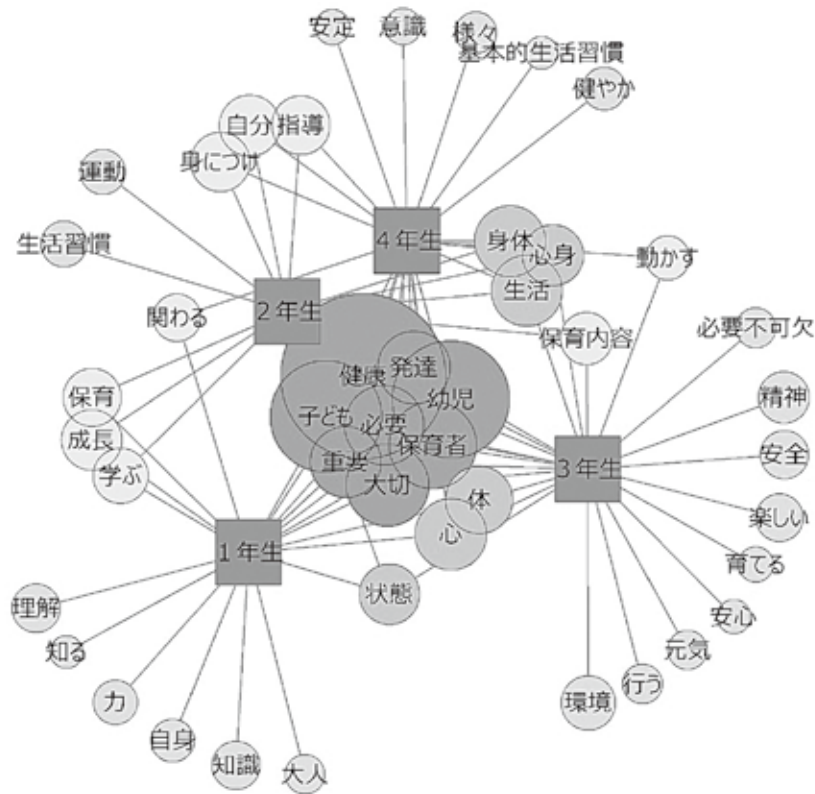


図1 健康諸概念に関する共起ネットワーク

表4 学年毎の特徴語と Jaccard の類似性測定

1年生	2年生	3年生	4年生
健康 .206	幼児 .209	心 .143	大切 .152
子ども .157	必要 .127	生活 .131	健康 .146
保育者 .132	発達 .085	子ども .129	子ども .134
成長 .103	自分 .080	身体 .127	身につける .112
大切 .094	状態 .074	体 .127	幼児 .111
学ぶ .088	指導 .066	安全 .117	保護者 .107
知識 .080	保育 .066	楽しい .092	体 .103
理解 .080	成長 .066	重要 .092	必要 .095
自身 .066	生活習慣 .058	精神 .089	動かす .093
状態 .061	運動 .054	保育内容 .088	心身 .093

りが見られると共に、子どもの姿や保育実践がイメージされた記述となってきている。3年生は、保育内容「健康」の授業は受講前であるが、これまでの授業科目や保育実習等の経験を通じて、このようなイメージが形成されていると推察される。4年生では、「動かす」「体」「基本的生活習慣」等の語との共起関係が強い。また、独自の語として「身につける」「健やか」「基本的生活習慣」「心身」等多くが見られる。「身につける」等、子どもに主眼が置かれ、心身共に健やかな生活を送るための保育者の役割について記述されている傾向が窺える。

学生は、表1に示されたように、高い保育職への興味・関心を持ち、実際に将来の保育職に向けた傾倒もある。保育者効力感も、高い水準にある。また、

保育職への理解、現在の保育力量の自己認知、現在の領域「健康」指導力の自己認知等、学年進行とともに数値は高くなっていることが示された。以上の結果を含め、次では具体的な文脈でどのように記述されているか、コンコルダンス分析等により確認しつつ質的に検討する。

3. 各学年における健康諸概念の質的検討

ここでは、学生の記述を具体的に取り上げ考察する。表5には、各学年における健康諸概念に関わる記述例を示した。表中には参考として、各学生の「現在の領域「健康」指導力の自己認知」の得点を（）内に記している。共起ネットワークに描かれた学年毎の独自の語にも注目しながら、特徴を挙げると次

表5 各学年における健康諸概念に関わる記述例

●1年生A (30)

「保育における健康とは、心身ともに発達し、伸び伸びと健やかに生活ができる状態。健康は幼児が成長する上で必要不可欠な要素であり、保護者や保育者が食事や睡眠、運動を管理することでより質が良くなるものである。保育内容「健康」では、保育者が保育するうえで留意しなければならない注意点や、幼児を健やかに発達、成長させていくための保育法などを学ぶ。保育内容「健康」は幼児の発達を促すために必ず学ばなければならない内容であり、真剣に、かつ柔軟に取り組む必要がある。私は保育内容「健康」を指導してくださる教職員の方に感謝の気持ちを忘れずに、わからないことがあれば自分から積極的に質問したり仲間と話し合ったりして「健康」への理解を深めていきたいと思っています。」

●2年生B (20)

「保育における健康とは、保育者が重視すべき項目の一つである。保育では幼児の成長をサポートするのはもちろんだが、幼児の心身を健康に保つことも非常に重要である。健康は幼児にとって重要なものである。安心をさせてあげることによる心の健康、けがや病気のない体の健康、どちらも幼児がすくすくと成長するためには欠かせないものである。保育内容「健康」では、幼児の心身の健康を目指す。保育内容「健康」は幼児の発達を促すためには必要不可欠なものである。私は保育内容「健康」を指導する上で、重要なことをまだ完全に理解できていない。これからの学びで幼児のためにできることをしっかりと考えたい。」

●3年生C (40)

「保育における健康とは、子どもが心も身体も元気な状態で、自分が楽しいと思うことに向かっていけること。健康は幼児が幼稚園や保育所等だけでなく、家庭でも伸び伸びと育つために重要なものである。保育内容「健康」では、心と身体を元気な状態で生活し、基本的な生活習慣や社会的なマナーなども身に付けていけるように援助をする必要がある。保育内容「健康」は幼児の発達において、身体的な発達だけでなく、心の面や社会的なマナーや習慣等も身に付ける上で大切なことである。私は保育内容「健康」を指導するにあたって、体を動かすことはもちろん、子どもが楽しんで活動できるように心がけて指導していきたい。」

●4年生D (50)

「保育における健康とは、子ども達の身体的なものだけでなく、心の育ちにも関わるものであり、子ども達が安心して健やかに育つために大切にしなければならないものである。健康は幼児が興味・関心を広げながら豊かに生活していくために必要不可欠なものであり、保育者が安心できる環境を整えながら受容的に関わることで心身の健やかな育ちにつながる。保育内容「健康」では、子ども達に育ててほしいねらいや、具体的にどのような関わりをすることで子ども達の健康な心と体の育ちにつながるのかについて、内容や内容の取扱いとして詳細に記されている。保育内容「健康」は幼児の発達に必要な不可欠なものであり、基本的な生活習慣を身に付けるために大切にしなければならないものである。子ども達の心と体の発達は、保育者との温かい触れあいから意欲につながっていくため、受容的に関わりながら様々な遊びを通して身体的・精神的発達を促すことが必要だと考える。私は保育内容「健康」を指導する際に、まずは子ども達の気持ちに寄り添った保育をすることで信頼関係を築き、子ども達が意欲をもって遊びに取り組もうとしたり衣服の着脱をしようとしたりする姿につなげることができるようになりたい。また、子ども達の興味・関心を読み取りながら遊びを提案することや、失敗を受け止める声かけなどをすることで子ども達のより健やかな育ちを支えることができるようにしたい。」

注) ()内は、各学生の「現在の領域「健康」指導力の自己認知」の数値である。本表では、「保育における健康とは」「健康は幼児」「保育内容「健康」では」「保育内容「健康」は幼児の発達」「私は保育内容「健康」を指導」など刺激文を補足している。

のようになる。

1年生の学生Aは、「現在の領域「健康」指導力の自己認知」が1標準偏差内ながらやや高い例である。学生Aの記述には高い学習意欲が示されているが、1年生では全般に、幼児の健康に関わる知識を付け、理解したいという強い意欲が表れていた。「私

は保育内容「健康」を指導_」と問うSCTの項目では、保育内容「健康」をどのように指導するか、考えや思いが記述されることを期待したが、1年生の多くの学生が、「していただくことで」「したことがなく」等と続け、指導をする保育者としてではなく、学習者として自分を位置付けて記述する傾向が窺え

た。また、保護者と連絡を取り合い、周りの大人が幼児の状態を見守り、健康を保つことが大切と捉えている。保育内容「健康」を小児保健に軸足を置いて捉えている傾向がある。健康は必要不可欠であり、全ての基盤と捉え、健康の範疇を、身体のみではなく、心の面でも捉え、記述している学生も多い。幼児なりに知ることが大切との記述も見られるが、「子どもに教えてあげたい」「～の大切さを話したい」等、「教える」ことへの意識が強い傾向も見られた。

2年生の学生Bは、「現在の領域「健康」指導力の自己認知」が1標準偏差内ながらやや低い例である。図1の共起ネットワークに示された2年生に注目すると、1年生との共通語が多く、共通点が散見される。例えば、「深く学び理解していきたい」「頑張っって勉強したい」等自らの知識、理解を重視していたり、健康を基盤的に位置付けたりしている点で共通している。一方、「私は保育内容「健康」を指導」と問うSCTの項目では、「する上で」「するにはまだ力が足りない」等と続けており、保育者として自分を位置付けていく傾向が窺えた。また、幼児の健康を周りの大人が気を付けていくべきことと捉えているが、保育者が主導して幼児の健康を守るべきとの意識が強くなっていることも読み取れる。そして、「一人一人の発達の状態を理解して」「保育者がしっかりと環境を整える」等、幼児の発達過程や個人差を意識した記述が散見される。生活や遊びの中で育むことや、保育内容としての意識等も見られる。睡眠、食等、幼児の健康に繋がる生活習慣について、具体的な記述も増えている。さらに、自分の健康を維持することの大切さに言及した記述も多い。1年次に、他の幼児教育・保育に関わる専門科目を受講したり、ボランティア等を経験したりする中で、幼児教育の基本を踏まえた記述が増えつつあると言える。

3年生の学生Cで注目すべきは、「私は保育内容「健康」を指導」に続けて、保育者としての視点で記述している点である。この傾向は、3年生以降に特徴的であり、「子どもの発達に応じた援助が適切にできるようにしたい」「～できるよう工夫をしたい」等、完全に保育者としての記述に入れ替わっている。そして、他の保育内容との関連性にも着目しながら、保育者として子どもの健康を支えるための環境構成の大切さにも言及する記述も多く見られる。育てる者になりつつある3年生の意識が窺える。また、健康を心身両面から捉えることに加えて、社会的な意味でも捉え記述している学生が多い。さらに、子どもの生命の保持と情緒の安定に言及し、健康と養護との関係に関わる記述も散見される。子

どもの健康のみならず、保育者自身や保育者となる自分自身の健康の重要性についての言及も見られた。また、1・2年生の記述には、あまり見られない安全に関する記述が見られ始める。子どもの健康を支える知識の習得の必要性だけでなく、その知識をどう活かすどのように指導するのか、指導法にも意識を向ける記述も確認できた。

4年生の学生Dの記述には、幼児教育の基本を踏まえながら、自分なりの保育観を持ちつつあることが窺える。このような傾向は、4年生全般に共通している。「子どもの発達に合わせた指導をしたい」「自ら意識を向けることができるようにしたい」等、保育の姿勢に関わる記述が多く見られる。記述内容は全般的に具体性があり、知識ばかりではなく、子どもの姿がイメージされている。「受容的な関わり」「遊びを通して」等、幼児教育の基本に関わる記述が散見される点は、1年生や2年生に見られた、「教える」というニュアンスの強い保育者の関わりと大きく異なる。子どもの健康は周りの大人が守るものという概念だけでなく、子どもが幼い頃から健康に関して高い意識を持つことが将来の健康につながることを認識し、子ども自らが健康を守るための正しい知識や技術を身につけられるよう、子ども主体の記述に大きく変容している。健康に必要な習慣や必要性を自ら獲得できるように、心情・意欲・態度を大切に指導していくことの必要性を述べる記述が多く確認できた。一方で、発達過程や個人差への対応、様々な生活習慣に対する指導について、知識だけでなく経験も必要であることを示唆し、特に低年齢児への配慮や援助については不安視する記述も見られた。

4. 各学年における準備性と授業展開の提案

ここまでの議論から、各学年の準備性が、いくつかの変数や記述から明らかになった。各養成校によって保育内容に関する科目の受講順は異なり、本論は、A大学の事例に過ぎないが、いずれの養成校においても学年毎の準備性や特徴を活かした授業展開が望まれる。それぞれの学年に保育内容「健康」に関する授業が配置された時、どのような授業展開が望まれるか、各学年の特徴を踏まえながら、授業の在り方について簡潔に提案する。4年制の養成校であれば、ほとんどどこも3年終了次には保育に関する実習を終えており、5領域に関する科目は、実習終了以前に受講していると考えられることから、4年生で保育内容「健康」に関する授業を受講することは考えにくい。授業の提案は1年生から3年生までを想定する。

1年次は、教養科目を多く履修する学年であるの

が一般的で、保育の専門に関する授業の履修は少ないと予想される。しかし、短期大学での養成では、実習は1年次後半から2年次中盤にかけて行う養成校が多いことから、1年次に保育内容「健康」に関する授業を受講する可能性は十分考えられる。まず1年生では、保育の原理や基礎的事項を学ぶため、保育内容5領域に関する授業を履修する前に「保育内容総論」を履修する。1年生で保育内容「健康」に関する授業の受講が想定される場合には、総論と同時期に受講、もしくはその後に受講となるであろう。総論の授業で幼児教育・保育の基本を理論として学んでいたとしても、深く理解しているとは考えにくい。まずは幼児教育・保育の基本を押さえた上で進めることが求められる。幼児教育・保育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことを基本としている。保育者が子どもに知識や技術を「教える」のではなく、あくまで保育者は発達に必要な経験が積めるよう環境を構成することが重要である。1年生の記述の特徴にある、保育者が子どもに「教える」というイメージを払拭し、子どもの主体的な活動を促す環境構成や保育者の援助の重要性を伝える必要があるだろう。その上で、特に保育の基本自体をイメージできにくい1年生には、保育や健康領域に関連する活動、子どもの姿を具体的にイメージできるような画像や映像、事例を活用した授業展開が望ましい。また、保育をする上で重要となる乳幼児期の発達の特性に関する理解を促すことも必要である。保育内容「健康」では、子どもの心身の発達に関する事項を他の領域よりも丁寧に取り扱うため、5領域の中でも早い時期に履修し、乳幼児の発達を基礎からしっかり学ぶことは、その後の5領域に関する学びを深めるに当たって非常に有効であると考えられる。

また、小児保健をイメージする学生が多かったのは、日常生活で使用される「健康」という言葉が、病気や健康というイメージを連想することからと考えられる。保育内容「健康」には、小児保健に関連する内容以外にも、小学校教育以降の保健体育的な要素に加え、健康教育、安全教育、基本的な生活習慣に関する事項や食育等、扱う範囲が広い。それを認識できるよう指導することも重要である。1年生は、入学当初ということもあり、保育職に対する興味関心が高い。高い学習意欲を持つ1年次に、学習者としての学習意欲を保ちながら、専門職としての保育者としての意識付けを行うことが大切だと言える。

2年生になると、保育の基本を学んだ上での授業展開が求められる。1年間の学びにおいて、少な

らず保育に関する知識を身につける中で、保育という営みが自分のイメージしていたものとは異なると感じたり、新たな知識と遭遇したりすることで、保育者となる自分の知識や意識が足りないことを認識する時期だと考えられる。一方で、学習者としての自分ではなく、保育者を目指す自分への意識が徐々に形成されつつある中で、そのような意識が持てるよう促す内容を取り入れることが望ましい。1年次に子どもの発達について学習していることもあり、保育に不可欠な発達の理解にも目が向き、発達や個人差を踏まえた保育内容の展開にも少しずつ注目できるようになる。単発的な知識の構築だけでなく、それを保育ではどのように活かし、どのような内容をどう指導するのか、そのような視点にも目を向けられるような授業展開が望ましいと考えられる。また、この時期の履修は、他の領域の授業を受講済み、もしくは何科目か同時受講中だと考えられ、他領域との関連性にも触れながら、5領域をそれぞれで捉えて指導するのではなく、総合的に指導するという視点も持てるようにすることも重要である。

さらに、体を動かすことや子どもの生活や基本的な生活習慣に関する事項にも目を向けることができるようになってくる。「健康に生活する」ための事項だけでなく、「安全に生活する」ための事項にも目が向くように、その重要性への理解も図っていくことが肝要である。

4年制の養成校において、3年次に保育内容「健康」に関する授業を受講する場合は、その他の保育内容に関する授業はほとんど受講済みであると考えられる。保育に関する実習も経験している場合が多く、学生の記述からも保育現場における子どもの姿や生活、具体的に健康に関するねらいや内容をイメージできていることが確認できる。このような段階の3年生には、実際の現場で見た子どもの実態と発達過程を摺り合わせ、実際の子どもの発達や姿、保育場面を想定した具体的に発展的な内容や指導方法を考えられるような授業展開が望ましい。具体的には、手洗い、うがい、歯磨きの仕方、防災訓練、防犯訓練、交通安全、感染症対策や熱中症予防、食育等、健康領域に関わる幅広い保育の活動を想定して、模擬保育を行うのが有効であると考えられる。学生同士で評価し合い、省察し合うことで相互に学び合う機会ともなるだろう。改めて『幼稚園教育要領』に示される「健康」のねらいや内容を押さえ、実習等の経験を踏まえてその経験を振り返りながら、他領域との関連も考えられる学習内容が求められると言える。

IV. 今後の課題

本論では、保育者志望学生が保育内容「健康」の授業実施前に抱く健康諸概念の特徴を検討した。具体的には、1年から4年までの比較から特徴を明らかにし、授業を実施する上での示唆を得た。また、今後の課題として、本論は、一養成校でのデータを扱っており、一般的な知見を得るために、他の養成校を含めた検討が必要であると言える。同時に、横断的データであるため、縦断的データによる検証も望まれるであろう。さらに、現職保育者のデータとの比較検討によって、授業改善のためのより具体的な方途の提案、実践、評価が可能となるであろう。

註

- 1) KHCoder：内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェア。<http://khc.sourceforge.net/dl.html>
- 2) 質問項目は西山ら（2017）とほぼ同じである。
- 3) ChaSen(茶筌)：奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発された形態素解析ツール。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 樋口耕一（2012）. 社会調査における計量テキスト分析の手順と実際—アンケートの自由回答を中心に 石田基広・金明哲編 コーパスとテキストマイニング 共立出版
- 樋口耕一(2013). KH Coder2.x リファレンス・マニュアル <http://khc.sourceforge.net/diagram.html> (2013年6月23日閲覧)
- 神長美津子（2017）. 教職課程認定基準の改正の概要 無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会編 幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～ 萌文書林
- 片山美香・伊藤智里・馬場訓子（2020）. 幼稚園教諭養成課程における領域「言葉」に関する専門的

事項の授業内容の検討 岡山大学教師教育開発センター紀要, 10, 49-61.

小林哲郎. (1999). S C T 氏原寛・小川捷之・近藤邦夫・鏑幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕編 カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房

松本裕治（2000）. 形態素解析システム「茶筌」情報処理, 41(11), 1208-1214.

三木知子・桜井茂男（1998）. 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46(2), 203-211.

文部科学省（2017）. 幼稚園教育要領〈平成29年告示〉フレーベル館.

文部科学省中央教育審議会（2015）. これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afie/ldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (2020年12月15日閲覧)

文部科学省中央教育審議会（2016）. 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afie/ldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2021年8月19日閲覧)

西山修（2021）. 保育内容「環境」の授業前において保育者志望学生が抱く環境概念の特徴 岡山大学教師教育開発センター紀要, 11, 1-13

西山修・岡村幸代・中川智之・片山美香（2017）. 保育内容「環境」の授業実践における環境概念の変容を捉える試み 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 166, 31-40

佐野勝男・槇田仁（1960）. 精研式文章完成法テスト解説：成人用 金子書房

付記

岡山大学・西山修教授より調査実施、分析への支援を戴きました。記して御礼申し上げます。